

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

第9章では,少数派多数派だけでなく,集団性の関与しない第三者の集団間行動に焦点を当て,集団性と集団間行動の関連性を検討する。

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動【研究6】⁵

格差の見られる集団間関係では,社会的アイデンティティの顕在化によらなくても,優越集団あるいは劣位の集団に対し好意的な態度や行動を示す可能性がある。例えば,「長い物には巻かれろ」や「寄らば大樹の陰」などの言葉に表されるように,人はときに優勢な集団に追従しようとする。反対に,弱い立場の劣位集団を援助することもある。したがって,少数派—多数派という集団間関係では,内集団であるか外集団であるかにかかわらず,単に「少数派であること」あるいは「多数派であること」によって,どちらか一方の集団をひいきしたり差別することも考えられる。また,集団認知の点では,第三者的立場の被験者が,少数派に対して不利なイメージを持ったり(ネガティブティ・バイアス, 杉森, 1993),ネガティブな行動を少数派と過度に結びつける(錯誤相関,Hamilton & Gifford, 1976)などの認知の歪み(認知的バイアス)を生じさせることが知られている。これに対し,従来の最小条件集団研究では,集団に所属する成員の行動にのみ注目し,当該の集団に所属しない第三者の行動について検討することはなかった。第三者の集団間差別行動を扱うことは,認知的バイアスのように,内集団高揚動機が作用しない状況でも行動レベルでの差異化が生じるか否かとい

⁵ 久保田健市 1997b 社会的カテゴリー化により導入された少数派,多数派および第三者の集団間差別行動と認知 心理学研究, 68, 120-128. (実験1)

う問題を扱うことを意味する。それゆえに,集団所属の意識が集団の現象に果たす役割を明らかにするうえでも意義があると考えられる。

以上より,研究6では,少数派および多数派だけでなく,第三者も含めた形で集団間差別の問題を検討する。少数派と多数派に対し,第三者は異なるイメージを持つであろう。しかし,社会的アイデンティティ理論の観点から言えば,少数派と多数派のどちらにも属さない第三者は,少数派と多数派のどちらもひいきしないと予測される。なぜなら,第三者は,少数派—多数派という集団間関係において,自身の社会的アイデンティティが関与しないためである。

目 的

研究6では,少数派,多数派,および第三者の集団間知覚および差別行動に関する以下の仮説を検討することを目的とする。すなわち,社会的態度の違いによって少数派,多数派および第三者にカテゴリー化されるとき

仮説1 少数派と多数派は,異なるイメージが持たれるだろう。

そして,

仮説2 少数派は,内集団をひいきし外集団を差別するだろう。

仮説3 多数派もまた,同様に内集団ひいき—外集団差別を示すだろう。

しかし,

仮説4 第三者は,少数派と多数派のどちらもひいきしないだろう。

方 法

被験者 筑波大学学生79人(男子30人, 女子49人)。被験者は,研究5と同じである。

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

手続き 実験は,意思決定に関する心理学的研究という名目で,全被験者を対象として一度に行われた。実験の流れをFigure 9.1に示す。最初に,被験者は6項目の社会的態度調査(「福祉と環境保護のためなら,消費税は10%にまで引き上げられてもいい」など)に対し,賛成—反対の8段階で評定した(Table 9.1)。回答用紙が回収された後,実験者および実験助手は集計のためとして教室からいったん退出した。

20分後,再び入室した実験者は,調査の結果について次のように教示した。「全体的に見て2つの態度の傾向のグループがあり,一方は全体の58%の人(多数派)が,もう一方は全体の12%の人(少数派)があてはまりました。残り的人はどちらにもあてはまりませんでした(第三者)」続いて,被験者は実験課題のための小冊子を手渡され,被験者自身の集団所属とコード番号(個々の被験者を区別するため)が知らされた。多数派は700番台,少数派は300番台の番号が割り当てられ,第三者にはコード番号は与えられなかった。実際には,被験者はほぼ同じサイズの3つの群に無作為に分けられた。その後,被験者は集団所属とコード番号のみが知らされた2人の他者に得点を分配する課題を行った。最後に,集団性の意識と集団イメージに関する質問紙に回答して,実験は終了した。

分配マトリックス 得点分配課題に用いられた分配マトリックスは研究4と同様である。得点分配は,少数派と多数派に得点を与える7試行と少数派同士あるいは多数派同士に得点を与える2試行(ダミー試行)の計9試行が行われた。内集団びいきの指標となる4種類のプル得点および内集団びいき得点は,正の値が多数派に対するひいきを,負の値が少数派に対するひいきをそれぞれ表すように算出された。

質問紙の構成 質問紙は,集団性をどの程度意識したかに関する項目,および,集団イメージの知覚に関する項目で構成された。

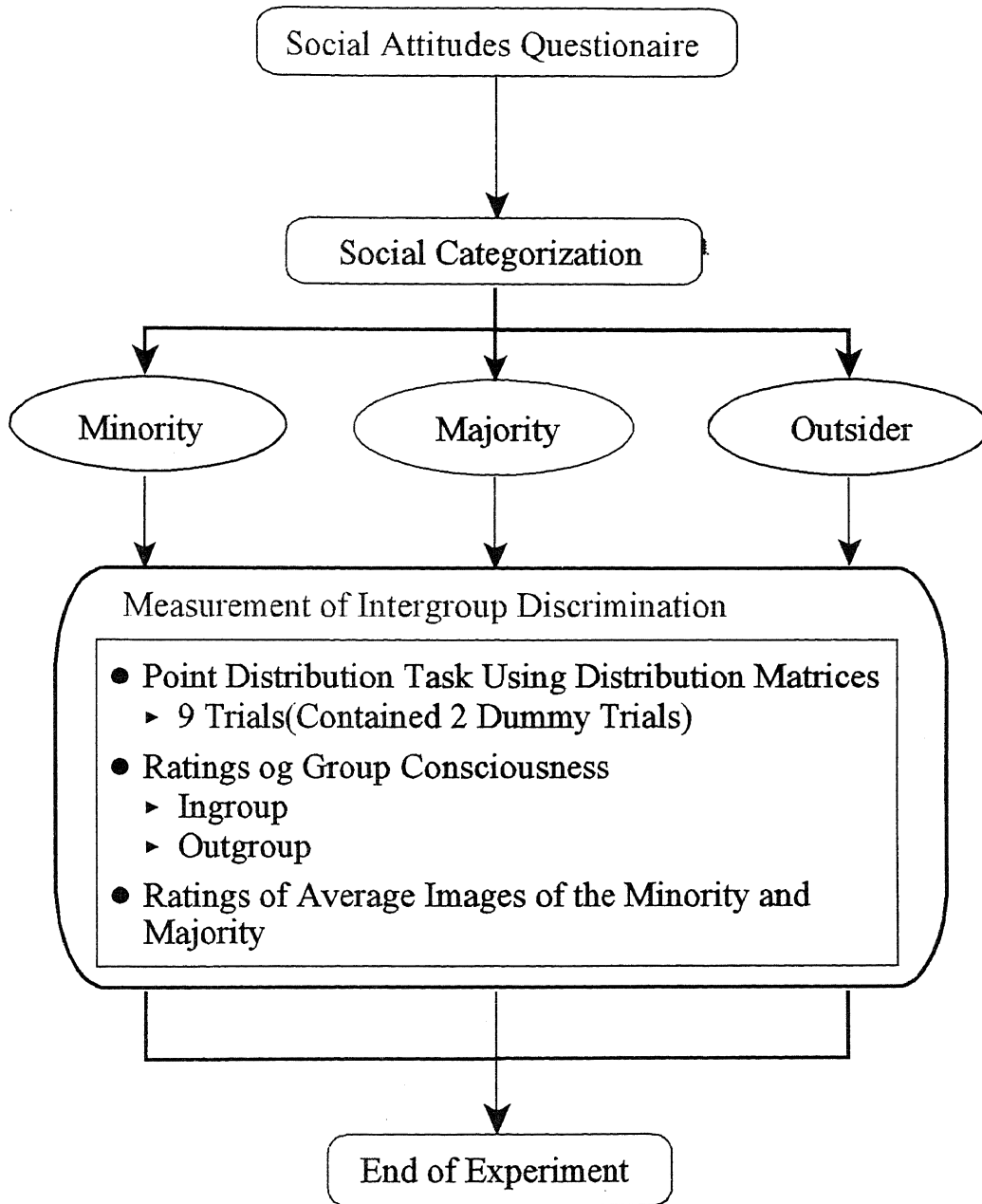


Figure 9.1 Flowchart in Study 6

Table 9.1

Six items of social attitudes questionnaire

-
1. 福祉と環境保護のためなら,消費税は10%にまで引き上げられてもよい.
 2. 同性愛は自然の摂理に反するものであり,社会にとって好ましくない.
 3. 人工妊娠中絶は,胎児の生きる権利を踏みにじるものである.
 4. 一人一人の能力と個性を尊重するために,中学校から能力別学級を積極的に採用すべきだ.
 5. 脳死患者の臓器は,必要な人のために,積極的に利用されるべきだ.
 6. 今後日本が,国際的に重要な役割を担えるようにするため,憲法改正も含めた制度改革を行うべきである.
-

Note. For each items, subjects rated their attitudes on 8-point scale (agreement - disagreement).

集団性の意識 少数派あるいは多数派に割り当てられた被験者は, (a)内集団の所属感,(b)外集団を意識した程度,の2項目について回答した(研究5参照). 第三者に割り当てられた被験者は,(c)多数派(d)少数派をどの程度意識したかを,「ほとんど意識しない」から「非常に強く意識する」までの9段階で評定した(0-8点).

集団イメージ 多数派および少数派について,その平均的イメージ(中心)を100mmの線分からなる5項目の形容詞対尺度(現実主義的な—理想主義的な,慎重な—大胆な,強硬な—柔軟な,平凡な—ユニークな,保守的な—リベラルな)上に記入させた.

結 果

社会的態度調査による集団所属の操作を十分に信じていないものと思われた15人のデータは,分析から削除された。

知覚された集団イメージ 集団態度の中心的位置(平均的イメージ)に関しては,評定値(0-100の範囲)の一の位を四捨五入し,11段階尺度(0,10,20,...100)に変換した後,分析を行った。少数派および多数派の知覚されたイメージについて,平均評定値をTable 9.2およびFigure 9.2に示す。評定者(少数派・多数派・第三者)ごとに,少数派と多数派の平均評定値の間で,対応のある t 検定(両側)を行った。その結果,

少数派($n=22$)では,「慎重な—大胆な」($t(20)=2.24, p<.05$)「平凡な—ユニークな」($t(20)=3.15, p<.01$)「保守的な—リベラルな」($t(20)=2.11, p<.05$)の3項目で,集団のイメージに有意な差異が見られた。

多数派($n=23$)では,「現実主義的な—理想主義的な」($t(21)=2.10, p<.05$)「慎重な—大胆な」($t(21)=2.41, p<.05$)「平凡な—ユニークな」($t(21)=4.79, p<.01$)「保守的な—リベラルな」($t(21)=4.20, p<.01$)の4項目で,集団のイメージに有意な差異が見られた。

第三者($n=19$)では,「平凡な—ユニークな」($t(18)=3.74, p<.01$)の項目でのみ有意差が見られた。

したがって,Figure 9.2に見るとおり,「強硬な—柔軟な」の項目を除き,少数派と多数派のイメージに差が見られた。これは,少数派・多数派・第三者という被験者の所属集団にかかわらず一貫していた。すなわち,少数派も多数派も第三者も,「現実主義的な—慎重な—平凡な—保守的な」多数派と,「理想主義的な—大胆な—ユニークな—リベラルな」少数派というイメージでとらえていた。

次に,少数派,多数派評定値ごとに,「強硬な—柔軟な」の項目を除いた4項

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

Table 9.2

Mean evaluation of each item for different targets and perceivers

Item	Target			
	Majority		Minority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Minority ^a				
Realistic - Idealistic	5.71	1.38	6.05	1.69
Cautious - Bold	5.38	1.20	6.62	1.56
Rigid - Flexible	6.00	1.18	6.19	1.40
Ordinary - Unique	5.10	1.30	6.81	1.57
Conservative - Liberal	5.38	1.50	6.57	1.33
Majority ^b				
Realistic - Idealistic	5.36	1.76	6.73	1.67
Cautious - Bold	5.05	1.46	6.59	1.82
Rigid - Flexible	6.09	1.82	5.91	1.51
Ordinary - Unique	4.86	1.04	7.09	1.66
Conservative - Liberal	4.59	1.56	6.91	1.66
Outsider ^c				
Realistic - Idealistic	5.63	1.98	6.16	1.92
Cautious - Bold	5.53	1.61	6.37	1.98
Rigid - Flexible	5.89	1.15	5.89	1.70
Ordinary - Unique	4.74	2.26	6.95	1.87
Conservative - Liberal	5.63	1.83	6.79	2.30

Note. The higher the rating, the more positive evaluations.

^a *n*=22, ^b *n*=23, ^c *n*=19

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動
 9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

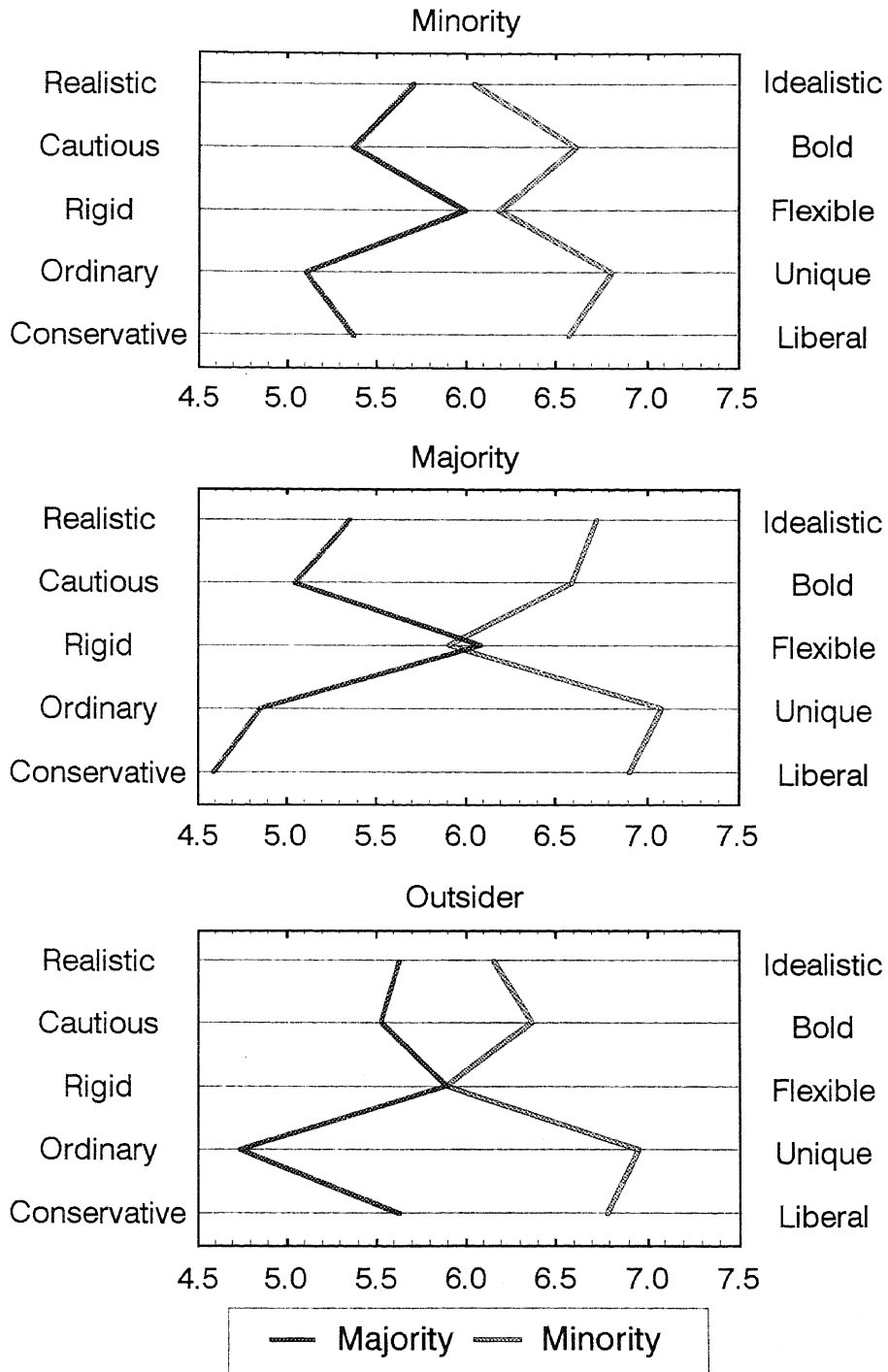


Figure 9.2 Mean evaluation ratings for different targets and perceivers

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動
 9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

Table 9.3
 Mean evaluation ratings for different targets and perceivers

Target	Perceiver					
	Minority		Majority		Outsider	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Majority	21.57	3.11	19.86	4.57	21.53	4.81
Minority	26.05	4.30	27.32	5.07	26.26	7.01

Note. The higher the ratings, the more positive evaluations.

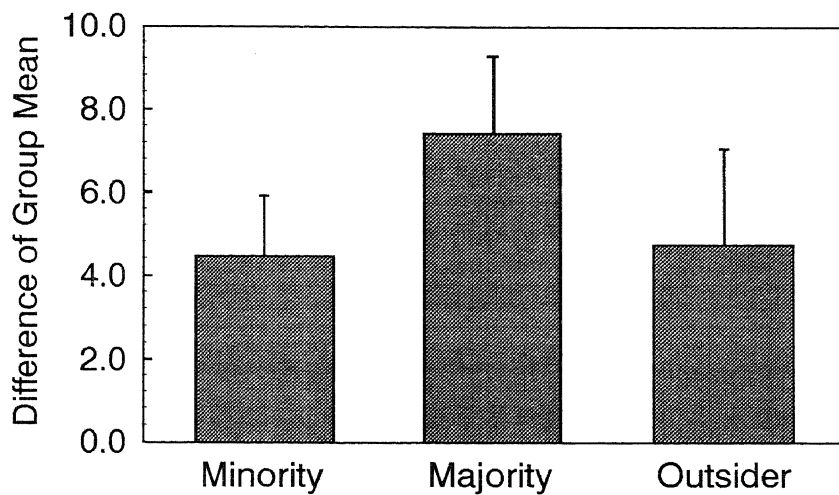


Figure 9.3 Mean evaluation difference scores for different perceivers
Note. The more positive the score, the more positive evaluation to the minority; the more negative, to the majority.

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

目で合成得点を算出した(合成得点の内的一貫性は,少数派,多数派それぞれ $\alpha=.79,.58$ であった. 得点が高いほど集団を肯定的に知覚していたことを表す). 合成得点の平均値をTable 9.3およびFigure 9.3に示す. 少数派,多数派,第三者ごとに対応のある t 検定(両側)を行ったところ,少数派と多数派で2つの集団イメージに有意差が見られた(少数派: $M=4.48$, $t(20)=3.12$; 多数派: $M=7.45$, $t(21)=4.04$, $p<.01$ 共通). 第三者では,イメージ差異化の傾向が見られた($M=4.74$, $t(18)=2.01$, $p<.10$). また,少数派評定値と多数派評定値の差を指標とし,所属集団を要因とする1要因分散分析を行った. しかし,有意な主効果は見られなかった. 以上の結果から,少数派,多数派,第三者という集団所属にかかわらず,多数派は「現実主義的な—慎重な—平凡な—保守的な」という比較的ネガティブなイメージで,少数派は「理想主義的な—大胆な—ユニークな—リベラルな」というポジティブなイメージで共通にとらえられていた. したがって,仮説1は支持されたといえる.

集団性の意識 第三者において,多数派と少数派を意識した程度の平均評定値をTable 9.4およびFigure 9.4に示す. 2つの評定値の差を検討するために,対応のある t 検定を行ったが有意差は見られなかった($t(17)=0.75$, $n.s.$). そのため,第三者が少数派($M=3.33$)と多数派($M=3.11$)のどちらかを特に意識するということはなかったと考えられる. 少数派および多数派における集団性の意識については,研究5で検討したため,ここでは省略する.

得点分配行動 内集団びいきを評価する4種類のプル得点の平均値を少数派・多数派・第三者のそれぞれについてTable 9.5およびFigure 9.5に示した. 「内集団びいき」については「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定,その他のマトリックスについてはWilcoxonの符号つき順位和検定を行った. その結果,少数派は「内集団びいきvs.公平性」($z=1.75$, $p<.05$)と「内集団びいきvs.最大共同利益」($z=2.37$, $p<.01$)の2つのマトリックスで,有意な内集団びいき

Table 9.4
Mean consciousness scores of majority and minority,
for the outsider in Study 6

Target	<i>M</i>	<i>SD</i>
Majority	4.11	2.65
Minority	4.33	2.70

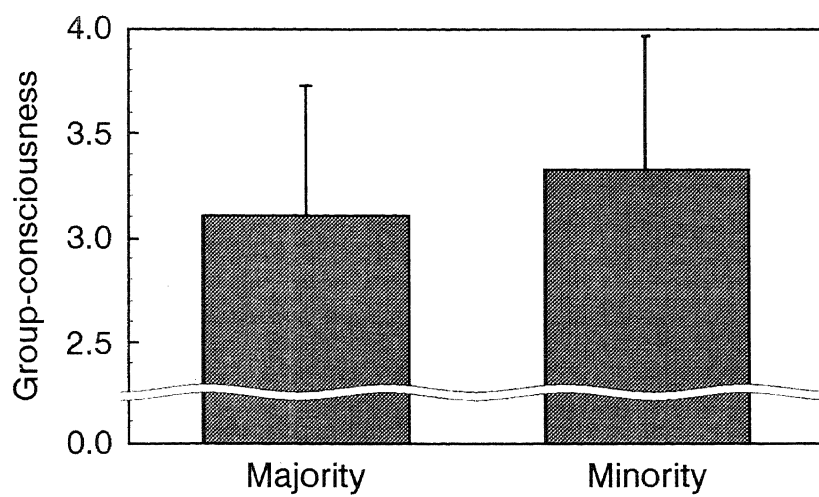


Figure 9.4 Mean consciousness scores of majority and minority, for the outsider in Study 6

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

Table 9.5
Mean pull scores in Study 6

Pull Score	Group Membership					
	Minority ^a		Majority ^b		Outsider ^c	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
FAV	-0.59	2.20	1.67*	3.20	-0.55	2.68
FAV on F	-0.77*	2.14	3.61**	4.56	-1.37	4.14
FAV on MJP	-1.45**	3.19	3.52**	4.88	-0.47	4.80
MD on MIP+MJP	-0.73	3.37	4.13**	6.67	-0.16	5.06

Note. The more positive the score, the more favoritism to the majority; the more negative, to the minority.

* $p < .05$. ** $p < .01$, One-tailed.

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

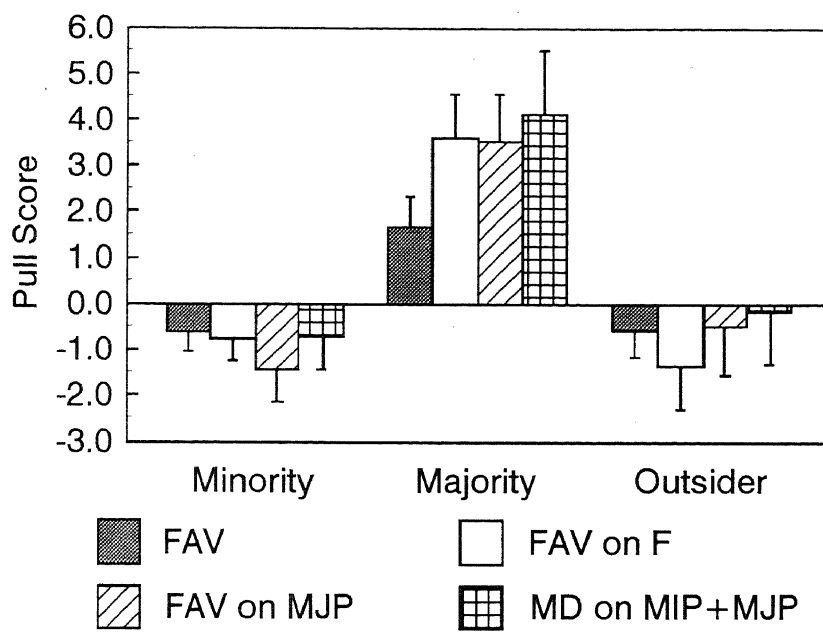


Figure 9.5 Mean pull scores in Study 6

Note. The more positive the score, the more favoritism to the majority; the more negative, to the minority.

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

を示した。一方,多数派は,「内集団びいき」($t(22)=2.51, p<.05$)「内集団びいき vs. 公平性」($z=2.94, p<.01$)「内集団びいき vs. 最大共同利益」($z=2.73, p<.01$)「最大差異 vs. 最大内集団利益+最大共同利益」($z=2.41, p<.01$)のすべてのマトリックスで,有意な内集団ひいきを示した。これに対して,第三者は,いずれのマトリックスにおいても,少数派あるいは多数派のどちらか一方に対し,有意なひいきを示さなかった。

同様に,内集団びいき得点の平均値をTable 9.6およびFigure 9.6に示す。「母平均値=0」を帰無仮説とする t 検定(片側検定)を少数派,多数派,第三者ごとに行った。その結果,少数派が有意に内集団をひいきし外集団を差別したことが明らかにされた($M=-7.82, t(21)=2.60, p<.01$)。同様に,多数派でも有意な内集団びいきが見られた($M=25.26, t(22)=3.80, p<.001$)。これに対し,第三者は,平均値で見ると多数派よりも少数派により多い得点を与えた。しかし,この少数派に対するひいきは有意でなかった($M=-5.42, t(18)=0.87, n.s.$)。以上より,仮説2,仮説3,および仮説4は支持されたといえる。

内集団びいき・集団イメージの差異・集団性の意識との関連 内集団びいき(内集団びいき得点)・集団イメージの差異(少数派評定値と多数派評定値の差)および内集団への所属感あるいは外集団を意識した程度(第三者に関しては,多数派あるいは少数派を意識した程度)におけるPearsonの積率相関係数を少数派,多数派,第三者ごとにTable 9.7に示す。多数派では,内集団びいきの程度と内集団への所属感および外集団の存在を意識した程度の間に関連が有意な正の相関が見られた。しかし,少数派および第三者については,集団イメージの差異と集団性の意識に関する指標の間に有意な相関は見られなかった。

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動
 9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

Table 9.6
 Mean ingroup favoritism scores in Study 6

	Group Membership					
	Minority		Majority		Outsider	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
IFS	-7.82**	14.10	25.26***	31.88	-5.42	27.04

Note. The more positive the score, the more favoritism to the majority; the more negative, to the minority.

* $p < .05$. ** $p < .01$, One-tailed.

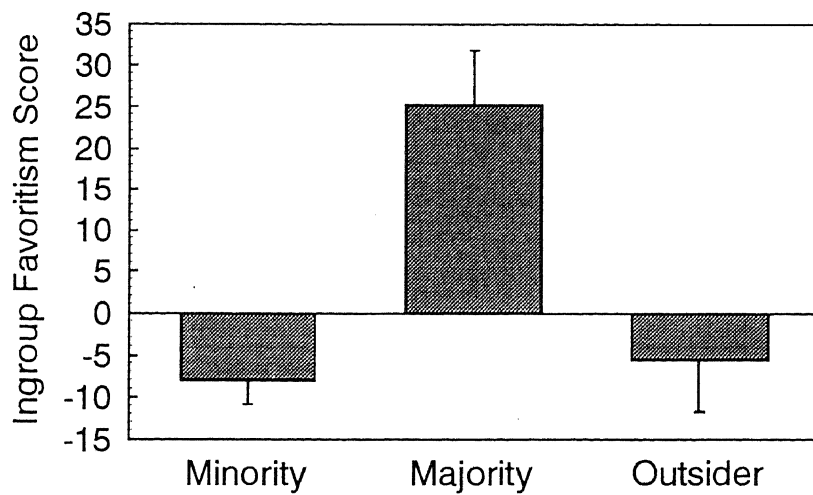


Figure 9.6 Mean ingroup favoritism scores in Study 6

Note. The more positive the score, the more favoritism to the majority; the more negative, to the minority.

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

Table 9.7

Correlations between ingroup favoritism scores, perceived group mean, and ratings of ingroup- and outgroup-consciousness, for the each subject group

	1	2	3	4
Minority(<i>n</i> =19)				
1. Ingroup Favoritism Score	--	.01	.30	.17
2. Perceived Group Mean		--	-.28	.02
3. Ingroup-Consciousness			--	.44*
4. Outgroup-Consciousness				--
Majority(<i>n</i> =21)				
1. Ingroup Favoritism Score	--	-.27	.52*	.45*
2. Perceived Group Mean		--	-.07	-.11
3. Ingroup-Consciousness			--	.79**
4. Outgroup-Consciousness				--
Outsider(<i>n</i> =18)				
1. Ingroup Favoritism Score	--	-.39	-.24	-.14
2. Perceived Group Mean		--	.27	.34
3. Consciousness for Minority			--	.88**
4. Consciousness for Majority				--

* $p < .05$. ** $p < .01$, One-tailed

考 察

研究6の結果は,少数派,多数派および第三者の集団イメージの知覚および集団間差別行動に関し,当初設定した仮説1,仮説2,仮説3および仮説4のすべ

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

てを支持したといえる。すなわち,集団イメージの知覚では,少数派も多数派も第三者も,ともに少数派と多数派という2つの集団のイメージを異なるものとして知覚した(仮説1)。これに対し,得点の分配行動では,少数派と多数派はともに内集団をひいきし外集団を差別したが(仮説2および仮説3),第三者は少数派と多数派のどちらもひいきしなかった(仮説4)。

少数派と多数派という集団サイズの格差は,単なる数的・量的な関係だけではなく,心理的な勢力関係や価値の優劣のイメージも含んでいる。本研究では,少数派は「理想主義的な—大胆な—ユニークな—リベラルな」集団として,多数派は「現実主義的な—慎重な—平凡な—保守的な」集団として,異なるイメージが知覚されていた。さらに,この集団イメージにおける差異化は,少数派,多数派および第三者という集団成員性の違いにかかわらず共通に見られた。その一方で,分配行動においてひいきを示したのは,少数派および多数派成員のみであり,第三者は少数派と多数派のどちらもひいきしなかった。言い換えると,第三者では,知覚レベルの集団間差異化は見られたのに,行動レベルの差異化は見られなかったのである。

社会的アイデンティティ理論では,集団間差別の説明原理としてカテゴリ—差異化(強調)過程と社会的比較過程という2つの認知過程を仮定している(Tajfel,1978)。研究6の結果に即して考えると,集団イメージの差異化はカテゴリ—差異化過程に基づくものといえる。すなわち,少数派と多数派という異質な2つの対象の差異性が,微妙に強調されて知覚される。そして,このような知覚レベルでの差異化は,少数派,多数派成員に限らず第三者においても見られるものであり,個人の社会的アイデンティティの意識化との関連性は比較的弱いと思われる。これに対し,行動レベルで集団間を差異化するときには,内集団—外集団という社会的アイデンティティの意識化が重要な意味を持つてくると考えられる。すなわち,第三者の観点から見れば,少数派も多数派も外集団であ

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

り,内集団としての自己の社会的アイデンティティは関与しない. そのため,社会的同一化に基づく社会的比較過程は作用せず,第三者は少数派と多数派のどちらか一方をひいきすることはなかった. 一方,少数派および多数派成員は明確な内集団びいきを示し,さらに多数派で内集団びいきと集団性を意識した程度の間には有意な正の相関が見られた. Doise (1978)は,社会的カテゴリー化が知覚・評価・行動という異なる3つのレベルでの差異化を生み出すと仮定し,知覚的差異化が評価的・行動的差異化を導くと論じている. しかし研究6の結果からは,自己を内集団の一員として定義し,よりポジティブに明確化したいという社会的同一化に基づく社会的比較過程が,内集団びいき—外集団差別という行動レベルの差異化を生じさせる上で重要な意味を持っていると考えられる.

一方,本研究で内集団びいきと集団性を意識する程度の間には有意な正の相関を示したのは,多数派のみであった. ここで,なぜ内集団びいきと集団性を意識する程度の間には有意な相関が見られたのが多数派のみであったのか,なぜ少数派で有意な相関が見られなかったのかという疑問が提出される. この点に関しては,次の2つの解釈が可能である. 第1に,実際には少数派でも集団性を意識する程度と内集団びいきの間に明確な関連が存在するにもかかわらず,統計的検定に用いたサンプルのサイズが小さいため($n=19$),有意とならなかった可能性が考えられる. 少数派でも,内集団の所属感と内集団びいきの相関は中程度の値を示しており,より多くのサンプルを用いていれば,両者の間に有意な正の相関が見られていた可能性がある.

第2に,本研究では少数派は「理想主義的な—大胆な—ユニークな—リベラルな」集団として,多数派は「現実主義的な—慎重な—平凡な—保守的な」集団として,知覚されていた. このことから,もし少数派のほうがよりポジティブで多数派がよりネガティブにみなされるならば,次のように考えることができる. すな

第9章 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

9.1 少数派,多数派,および第三者の集団間差別行動

わち,ポジティブな外集団と対峙することによって,ネガティブな集団は自身の社会的アイデンティティに脅威を感じるため,それを意識しやすい. その結果,ネガティブな集団(本研究では,多数派)のほうが集団性の意識と内集団びいきの関連を示しやすくなるのではないかと考えられる. しかし,集団イメージの差異の大きさと集団性の意識の程度の間,および,集団イメージの格差と内集団びいき得点との間に有意な相関は見られず,上記の議論を支持する証拠は得られなかった. 本研究の結果からは,集団性の意識と集団間差別行動の関連に関する少数派と多数派間の結果の相違について,適切な解釈をすることは難しい. 今後の研究では,本研究で示唆された集団イメージの肯定性—否定性に限らず,集団性の意識化を促進したり抑制したりすると考えられる要因(例えば,個人の類似性など)を取り上げ,その効果を検討する必要があると思われる.

9.2 まとめ

この章では,少数派および多数派の集団成員に加え,自身の社会的アイデンティティが関与しない第三者を含め,集団間差別行動の問題を検討した. 集団認知の点では,集団成員だけでなく第三者もまた2つの異なる集団の差異をより強調して知覚することはありうる. 本研究でも,被験者の集団成員性にかかわらず,少数派は「理想主義的な—大胆な—ユニークな—リベラルな」集団として,多数派は「現実主義的な—慎重な—平凡な—保守的な」集団として,それぞれ知覚されていた. これに対し,得点分配行動では,少数派および多数派成員のみが有意な内集団びいき—外集団差別を示し,第三者はどちらか一方を明確にひいきすることはなかった. この結果から,集団間差別という行動のレベルの差異化に限って言えば,内集団—外集団という観点から自己および他者をとらえ,内集団をポジティブな形で明確化したいという,社会的同一化の過程が重要な意味を持つてくると考えられる.